

災害に備え、災害時に生かせる市民・公益活動団体の連携手法に関する検討

松田 曜子
2009年名古屋都市センター特別研究員／
NPO法人レスキューストックヤード

「協働」の枠組みとボランティア現場のかい離

「協働」の理由

- 市民の主体的な参加
- 行政の対応能力の限界
- 市民ニーズの多様化 …

現場の行動原理(災害ボランティア)

- 災害から命を守りたい
- 何かしなければいけない
- 楽しい



現場のボランティアの行動原理は、一般的な「協働」の理念、枠組みとは必ずしも一致しない



あいち協働ルールブックより

「防災ファッションショー」の風景

地域社会にとっての公共的課題



研究の目的と手法

研究目的

- 防災を例に、現場で活動するボランティアが他の主体と連携するまでの過程を整理する。
- 防災以外の目的のために集う市民団体が防災という課題に関連して抱く関心や不安を明らかにする。

研究手法

- 災害ボランティアへのインタビュー(第3章)
- 市民団体へのアンケート(第4章)、追加インタビュー(第5章)

既存研究の整理

- 防災のための協働—「自助・共助」
 - 「受け身の自助」と「内発的自助」(片田, 2009)
 - 依存している公助に限界があると言われ、仕方なく自助 VS. 助かりたいからこそ動く自助
 - 行政や研究者でさえ何が正しい防災対策(真理)が示せなくなってきた時代背景(矢守, 2009)
 - 「正しい防災対策」に裏打ちされるべき自助・共助が、「正しい防災対策」のゆらぎのために必要とされるジレンマ

→本研究では、小規模ながらも確実に内発的自助(共助)を実践している現場の経験から、その動機を明らかにする。

団体間の連携不足による課題(災害時)

- 2008年8月末豪雨
 - 災害ボランティアと地縁組織、他分野のボランティア間の没交流



災害ボランティア「私ただけではニーズは拾えない」



町内会長「ボランティア？知らない人は地域に入らないでほしい」



災害ボランティア団体へのインタビュー

- なごや防災ボラネット
 - 名古屋市内各区で、災害に強いまちづくりと被災者支援の活動を行う災害ボランティアで構成されるネットワーク組織
 - 月例の連絡会（＋名古屋市＋市社協＋国際C）で、行政や専門家を迎えた勉強会、各種啓発イベント等の連絡調整を実施し、昵懇の関係を築く
- 8団体9名にインタビュー
 - 「あなたの区の〇〇の活動について自由に披露してほしい」

事例1) 家具てんぼう隊(守山区)

- 2005年より区内の耐震留具取付サービス事業を同区社協より受託、ボランティアで実施
- 家具留め技術は建築士の任意団体「わがやネット」に学ぶ
- 助成金で専門的な道具も整備



事例2) 災害ボランティアセンターの設置協定(天白区)

- 区災害ボランティアセンター(活動拠点)を名城大学八事キャンパス内に設置することが、地域防災計画に明記
- ボランティアセンター設置運営訓練も実施
- ボランティア団体の働きかけによる区の決定



事例3) 商店街での子ども防災訓練(北区)

- 子育て支援NPOの依頼で、防災ボランティアグループが企画し、親子の防災訓練を実施
- 2008年8月末豪雨で被災した店舗にも協力を依頼



ボランティアによる「現場の合理性」

- 家具てんぼう隊の活動中、「おしゃべり隊」が生まれた経緯

「そのうちに、お年寄りの話を聞くのもいいんじゃない、とおしゃべり隊が結成された。作業中の目を逸らしてもらって役目のおしゃべり隊に、一人暮らしのお年寄りは困りごとを次から次へと話した...」
- 災害ボランティアセンターの設置場所として大学を推薦した理由

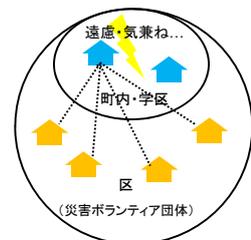
「天白区役所は駅から遠く不便。区社協は駅の真上だけ資器材を置くことができない。そのうちに誰かが、『名城大学がいいんじゃないか』って...」

ボランティアの現場では必要に迫られて、他の人の手を借りた結果が「連携」になっている。

地域における災害ボランティアの役割

- 地縁団体ではない、程よく近所のボランティア団体

「自治会や職場の振興会のように、自分もそこに入って助け合うようなものではなく、守山という近所に住んでいる助け合いの団体。だから、近所の電気屋さんに頼むのと同じように、困りごとを頼めるんじゃないか...」



その他

■ 災害ボランティアと他の地域組織の関わり

「誰かがやれることなら誰かがやるが、私にしかできないことは私がやりたい...」
「商店街のなかでも『子育て支援』という社会的な役割を持つ遊モアが防災訓練を開いたことで、商店街全体から注目してもらうことができた。」

■ 行政との関係

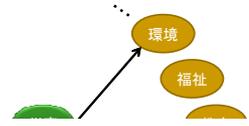
「行政との理想の関係は対等だけれども、『いつもありがとう』とお互いがねぎらい合う『持ち上げ』が重要。お互い持ち上げて、相談をもちかけるような感じで接すればお互いが気持よくなる。やっтерことは『陳情』なのかもしれないけど、やり方が違うんだ。」

■ 災害ボランティア団体相互の関係

「設立してまだ2年。うちはまだ『先進区』の勉強中。」

市民活動団体へのアンケート調査

- 一般の市民活動団体に対し、「災害」に関して抱く不安や話題を聞く。



結論

- 防災ボランティアは、その活動のなかで合理的なアイデアを実現するために、様々な主体との連携が図られている。また、地域における信頼を得られるように、行政とも連携を図るような動機がある。
- どのような種類の市民活動団体であれ、災害と自分たちの団体との関連についての意見があり災害ボランティアとの連携によって実現する可能性が示された。

政策提言

- 災害＝地域社会を総合的に試す外力
- 枠組み先行型の連携から課題指向型の連携手法



- 東海・東南海地震災害等への名古屋の対応の布石
- 全ての公共的課題の解決のために必要な視点